

# 北鮮脱出記

寫末 稔

編集委…本稿は、昨年の『修親』11月号に掲載されたものを、同刊行会事務局の許可を受け転載いたします。寫末稔氏が終戦後、すさまじい経験をしながら北鮮（北部朝鮮）から日本に引き揚げてきた記録で、ご子息の寫末真氏（陸自85）がとりまとめられたものです。

## ご子息、寫末真氏のまえがき

本エッセイは、小生の父、寫末稔が終戦後、北鮮を如何に脱出したかについて記したもので、小生が自衛官の時に父から渡されました。凄まじい経験を経て北鮮から日本に引き揚げた状況を克明に記録しております。是非、皆さんにも父の体験や思いをお伝えしたく、記録に残すこと

にしました。  
以下、父のエッセイに譲りたいと思います。

## 1 寫末稔、生い立ちの記

### (1) 大連での出生

私の父はシベリア出兵、第1次世界大戦と青春時代のほとんどを、中国及びシベリアにおける軍務に服し、除隊後も夢を滿蒙の地に託し、昭和の初め以来、関東州大連市（現在の中国東北部の大連）に居住し、満洲国建国のために微力ながら尽くしていたようである。どのような組織に所属していたかは父の口から聞いたことはないが、当時、満洲の地方に点在していた馬賊の帰順工作に従事していたようである。私は昭和

ように抱き上げてかわいがってくれた。後に父から、私と同じ年の息子がいたが、事故で死亡された旨聞かされた。

私が中学を修了して、満洲国の国立大学哈爾濱学院に進学する直前、父の話によれば王氏は既に上将となつて、満洲国軍の第8軍司令官をしている由であつた。そして、そのときはじめて王氏が帰順するときに父と交わした義兄弟の縁を結ぶ血書を見せてもらった。学院入学後にももらった父からの手紙によると、その後、王氏は、満洲国皇帝の侍従武官長として転任した由であつたが、最後は皇帝とともに運命を共にしたのか処刑されたのか消息不明のままである。

3年11月に大連市久方町で生まれ、小学校は朝日小学校、次いで南山麓小学校で3年生の1学期まで学んだ。

満洲国建国後、父にも東滿3省の顧問や満軍の要職への勧誘があつたが、なぜか公職への一切の誘いを固辞し、北鮮の羅南に居住していた親戚を頼り、隠遁することとなつた。

小学校に上がる前頃、月に数度帰宅する父から、土産話に帰順させた馬賊の話をしげしげ聞かされた。そして、そのうちの一人が大連埠頭で父とともにお会いしたことがある。

(2) 羅南への移住と哈爾濱学院への進学

その人の名は王殿忠といい、満洲国軍の偉い人だつた。私を我が子の

私たち家族（母、姉、兄3人と私）も、中学生だつた上の兄2人を大連市に残し、昭和12年7月、北鮮の咸鏡北道清津府羅南へ父とともに移住

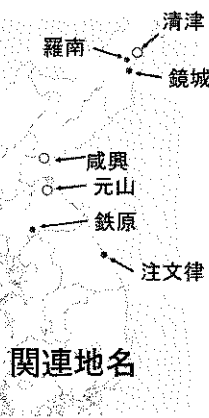
することになった。

西欧的な近代都市大連に比べ、本  
当に静かな緑に囲まれた羅南の町  
は、帝國陸軍第19師団主力及び威鏡  
北道庁の所在とは思えないほど、平  
和な片田舎の町だった。羅南におけ  
る父は、しばらくは悠々自適な生活  
を送っていたが、まだ50歳前の若さ  
を持って余し、頼まれて同庁の嘱託(福  
社担当)や漁業組合理事をしたり、  
別府郊外の割烹旅館の次男坊として  
生まれてきたので、見様見真似で覚  
えた包丁さばきを用人たちに教

え、羅南高等女学校、次いで羅南中  
学の寄宿舎の賄いを請け負ったりし  
ていた。更に余暇には別府の美術学  
校で習った日本画をたしなむ初老の  
諦観の域に達していた。

父は自分の果たせなかつた夢を息  
子に託すつもりか、父の強力な勧め  
で、私は昭和20年の春、羅南中学校  
4年修了後、前述の通り満洲国立大  
学哈爾濱学院に進学し、ひたすら口  
シア語の勉強に専念していたが、同  
年7月上旬、軽度の結核(右肺尖浸  
潤)と診断され、約1カ月の予定で  
羅南の父母のもとに帰省、療養する  
ことになった。

もらったところ、大した病気ではな  
く、栄養を取って、ぶらぶらしてい  
ればすぐ元気になると言われ、私と  
同病で、京城薬専から帰省中の中学  
の同期生の福島君とともに、油坂の  
海岸近くにあった朝鮮人の小学校に  
臨時教員として手伝ったりしてい  
た。やがて体調も回復したので、そ  
ろそろ復学しなければと考えていた  
矢先、突如としてソ連軍による侵攻  
が開始されたのである。時に昭和20  
年8月9日であった。



## 2 ソ連軍の侵攻から北鮮脱出まで

(1) 戦火からの避難と終戦  
第19師団による反撃を期待してい  
たが、主力を名峰に移駐させた留守  
部隊だけだったようので、その力はな  
く、現地召集の第二国民兵を主体と  
した兵力で、必死の抵抗を試みたが、  
羅津から清津に至る海岸線上の侵攻

を防ぎ得なかつたようである。  
侵攻と同時に、ラジオ報道も途絶  
え、隣経理由の情報配布もなく、戦  
火からの避難誘導の指示も一切な  
く、聞こえるのは艦砲射撃の音と、  
見えるのは、夜間の空を焦がす遠い  
戦火のみであった。それと口コミに  
よる噂のみで、情勢を判断せざるを  
得なかつた。

当時、「このままでは、間もなく  
日本は負ける」とハ爾濱学院の入学  
式での院長訓示、また近傍の朝鮮人  
たちの挙動不審な集まり、敗戦の噂  
話など、今更ながらしみじみと思い  
返している。

昭和20年8月10日から11日かけ  
て、南に避難する日本人を載せた列  
車が、何本か羅南駅を出発、または、  
通過していくのを見ていたが、ちょ  
うど近くに嫁いでいた姉が腹膜炎を  
起こし、病床にあつたため、動かす  
ことができず、心ならずも、そのま  
ま羅南に残留することとなった。こ  
の間に軍官舎の家族及び道庁官舎の  
家族は、軍とともに南方ではなく、  
北方の山岳地帯(古茂山方角)に向  
かって避難し、その他の残留日本人  
たちもそれぞれ思い思いの方角へ、  
散り散りに避難していったようであ

る。気が付いたときは、私たち一家  
6人(父・母・姉婿・姉・姪と私)  
と同様に、動きの取れない年寄りや  
病人を抱えた日本人だけが、取り残  
されたような感じだった。脱出直前  
の福島君と、18歳以上の動員に応じ  
るため、軍事部へ駆けつける伊東君  
に会ったのが、羅南における中学時  
代の同期生の最後の別れとなった。

13日になって、いよいよ上陸した  
ソ連軍が突入してくる、との噂を近  
くの朝鮮人たちから聞き、大八車に  
姉と姪(当時3歳)を乗せ、我が家  
も南下せざるを得なくなつた。その  
日は羅南の市街地を通り抜け、南端  
の丘の上にあつた護国神社まで避難  
するのが精一杯であつた。

翌14日は、早朝からソ連機(旧式  
複葉機)による19師団兵舎への爆撃  
が、連続的に行われたため危険とな  
り、再び南下を開始し、途中、鏡城  
の河原で野宿した後、朱乙の奥の温  
泉地までたどり着いたのが、15日の  
夜であつた。そこにはロシア革命の  
とき、ソ連から亡命してきたヤンコ  
フスキー伯爵一家の家があり、同家  
の使用人から、片言のロシア語で情  
報を集めようとしたが、彼らもソ連  
軍の侵攻に関しては何も知らず、

困っている状態であった。ここでも在住していた日本人は一人もおらず、皆それぞれ南下、又は西方の山の中に避難していった旨、そのロシア人が話していた。

2、3日そこで様子を窺っていたが、新しい情報は一切入らないので、とりあえず、南方の金田温泉まで南下したが、ここでも在住の日本人は一人もおらず、空き家となった温泉旅館に入り、しばらく様子を見ることにした。そこへ、日本軍の将校がオートバイで訪れ、終戦を知らせてくれたのが、18日頃だったと思う。そして旧居住地へいったん帰り、当局の指示を待てることだった。

元の使用人の朝鮮人一家が、既に住んでいたもので、とりあえず、近くの日本人の空き家に入り、当局の指示を待つことにした。元の使用人が気の毒がり、私たちの残していった食糧や衣類をかき集め、差し入れてくれた。

夜間になると、酒に酔ったソ連兵が侵入してきたり、周囲の朝鮮人の様子も不穏に見え始め、指示を出さず当局も見当たらぬ、不安に思っていたところ、清津から日本へ向けての引揚船が出る、との噂を近くの朝鮮人から聞き、再び大八車を曳き、清津港に向けて羅南を出発したのが、8月の下旬頃だったと思う。しかし、この噂は、私たちを追い出すための偽情報だったようである。

この無責任な将校の勧告に従ったことが、悲劇の始まりであった。途中、鏡城の峠で初めてソ連軍の第一線部隊と接触し、隠し持っていた日本刀二振りと拳銃一丁を没収されたが、北上は許された。その後も、ソ連軍部隊に遭うたびに、荷物と身体検査が行われ、その都度、めぼしい財産(貴金属や時計)は没収され、やっこの思いで羅南の自宅に着いた

ら、元の使用人の朝鮮人一家が、既に住んでいたもので、とりあえず、近くの日本人の空き家に入り、当局の指示を待つことにした。元の使用人が気の毒がり、私たちの残していった食糧や衣類をかき集め、差し入れてくれた。

清津まで無事たどり着いたが、ちょうど清津埠頭の前で再びソ連軍の検問に遭い、今度は父・義兄・私たち男3人が有無を言わず逮捕され、清津刑務所に収監されてしまった。同刑務所には、日本人の男性ばかり約2、300人が収容されていた。食糧は生大豆と水だけで、しかも3畳くらいの独房に15人ぐらい詰め込まれ、このままでは死ぬのではないかと思つた。

清津では、ソ連軍の清津地区警備司令官と称するスミルノフ大佐が、しばしば私たちの住んでいた、元日本窒素の社宅地区を巡視のため訪れ、私が哈爾濱学院で習ったロシア語で、とつとつと話しているうちに親しくなり、時々、コメや塩漬けの鯿を、われわれ日本人に配給してくれた。また、内地への引揚船の計画は、今のところない旨語ってくれた。

乗せ羅南を目指して北上することになった。

清津埠頭におけるソ連軍による逮捕

途中、羅南のはずれにあつた旧軍隊の演習場でソ連軍の検問に遭い、雨中の演習場に一晚足止めされた。翌朝釈放されたが、たまたま近くをソ連兵に引率され、通つて行つた日本軍の兵士の列の中に、羅南中学校の恩師(熊野御堂先生)がおられ、お互いの健闘を祈り、お別れの言葉

次々と訪れ、最後に、清津の西端の丘の上にあつた元日本窒素の社宅で、やつと再会したのは、釈放後、5日目ぐらいであつたと思う。途中、羅南でお世話になつていた山田病院の院長一家の自殺を聞き、病院の前で、ご冥福をお祈りした。

を交わしたのが、その後、消息不明

その1週間後ぐらいに義兄たちも釈放されたようであるが、ついに、現在まで行方不明のままである。父と私は、清津埠頭で別れた母たちを探すため、再び羅南に戻り、逆に清津に向けて日本人がおりそうな所を

ある晩、裏の小学校の校舎が、不審火で全焼した。その翌日、北鮮保安隊の約一個小隊が私のもとに来て、放火犯容疑で逮捕する旨宣告し、彼らの本部へ連行された。身に全く覚えのないことなので、強く釈放を要求したが、一切受け付けてくれず、毎日殴る、蹴る、重たい石を膝の上に載せての正座、逆さ吊り、水責めなど、拷問の数々を受け、自白を強

つた。父と私は釈放されたが、義兄は30歳代のため、道庁職員であることを主張し、私たちも支援したが認められず、引き続き拘留されてしまった。

(2) 清津埠頭におけるソ連軍による逮捕

(3) 北鮮保安隊による拷問と南方への脱出

要された。頑として受け入れなかつたところ、約1週間後、急に釈放された。あとで保安隊員の一人がひそかに話してくれたところによれば、ロシア語を話す日本人がいると邪魔なので、放火犯としてでっち上げ、消すつもりであったが、私の行方不明を知った前記のスマイルノフ大佐が、手を回してきたので、やむを得ず、一旦釈放した由であった。身の危険を感じた私は、できるだけ速やかに南方に脱出することを決意した。

その決行の日に、駅頭で、ばつたりと顔見知りの保安隊員と会ったが、彼が本部に電話している間に、動き出した列車に家族とともに飛び乗り、危うく難を逃れることができた。

(4) 南方への移動と38度線突破の挑戦

途中、何回か列車(貨車や客車)を乗り継ぎ、その度に、ソ連兵や北鮮保安隊による略奪や暴行を受けながら、やっと5日目の夕方ごろ、38度線近くの江原道平康駅にたどり着いた。

ソ連兵の目当ては終始金目のものか、婦女暴行で、幸いにもウラジオストックで水商売をしていたといふ、多少ロシア語を話す老婆が何人

かの同業の若い女性とともに同乗していたので、最悪の場合には一般の婦女子の盾となつて守つてくれた。保安隊員による暴行は、36年間にわたる日本の支配に対する恨みを晴らすのが目的のようで、肉体労働をしていなかった日本人を、体格や手のひらで選別し、殴つたり、突き飛ばしたりして暴行を加えていた。父も私も、手のひらが白すぎるといつて殴られた。

平康駅からは徒歩で南下し、暗夜を利用して38度線の突破に挑戦したが、まるで待ち構えていたかのよう

に、国境警備の保安隊員に発見され、ソ連製の自動小銃で乱射された。身の軽い男だけなら、地形地物を利用してしながら逃げることも可能であったが、なにしろ、女・子供連れのため降伏せざるを得なかつた。早速近くの警備本部に連行され、旧日本軍から復員したと称する保安隊員により一晩中取り調べと暴行を受けた挙句、再び北方へ送り返されることになった。このまま清津まで戻れば、

昼間だったため、果たせなかつた。元山駅でも取り調べの保安隊員に、うかつにも内地へ帰りたいと言つたばかりに、「内地とはなんだ」と殴る蹴るの暴行を受けた。

保釈中の逃亡犯として再び逮捕されることは明らかであつたので、途中、まず元山駅で列車からの脱出を図つたが、駅構内の警戒が厳重で、かつ

次

の比較的大きな町で、日本人が大勢おりそうな町は、威興であつたので、今度こそ是が非でも脱出を図るべく決意していた。威興でも日本人のこれ以上の流入を阻止するため、嚴重な警戒を行つていたが、夜間に紛れ何とか街に潜入することができた。とりあえず中心街とは反対の方角へ行くと、威興神社らしいものが見えたので、早速、本殿に潜み、2、3日様子を見ることにした。ここでも、毎晩のように酔つ払つたソ連兵が侵入してきたが、シベリア出兵仕込みの父と、哈爾濱にわか仕込みの私の下手なロシア語で、なんとか、その都度追ひ払つてきた。しかし迫りくる寒波と飢えに耐え切れず、日本人避難民が大勢収容されていた町の中心部にあるお寺に移動することにした。ちょうど昭和20年11月初め頃のことであつた。

あつた。在校中は言葉を交わしたこともなかつた先輩から「寫末ではなにか」と声をかけられたときは、正に地獄で仏に会つたような気持ちであつた。田谷氏も脚気のため、3カ月間の予定で北朝鮮の叔父の家に帰省、療養中のところ終戦となり、威興では、既に日本人世話会の通訳として、大變貴重な存在になつていた。同氏は早速、私を終戦まで威興医学専門学校があつた(元の済患病院)跡に設けられた日本人世話会とソ連軍による共同経営での日本人避難民のための伝染病病院の通訳として送り込んでくれた。同氏は日本人世話会の通訳の他、主に病院長ペトロフ少佐の通訳として病院の運営のため、病院長とともに東奔西走されていた。私は、主として副院長ベレーンス少佐の通訳として、主に診療業務を担当することになった。総計四百床程度の病院であつたが、最盛期には直接マットを床に敷くことにより、千床近くの收容能力を有していた。

当時、威興及びその周辺地域には、約2万5000人(うち半数以上は戦後北方からの流入者)の日本人が避難生活をしてしたが、飢饉と寒さ

#### (5) 避難民の救済活動

そこでばつたり会つたのが、哈爾濱学院の一期先輩の田谷榮近氏で

約2万5000人(うち半数以上は戦後北方からの流入者)の日本人が避難生活をしてしたが、飢饉と寒さ

と不潔な生活のため、発疹チフスが蔓延し、毎日80人近くの日本人が倒れていくのを見るに見かねたソ連軍が、自分らの野戦病院の一つを提供し、この病院を開設したのであった。

この病院は、ソ連軍の軍医6〜7人と兵士約30人のほか、日本側は、日本人医師、看護婦、その他の従業員合わせて40〜50人で編成されていた。それからの毎日は、ソ連軍医の街頭巡回検診や患者の収容・治療の際には、通訳として同行したが、何しろ3カ月の教育で得たロシア語の知識しかない私にとって、満足な通訳などできるはずがなかった。まして医療分野の用語など何一つ知らないのが当然であったが、「北鮮で少しでもロシア語を話せるのは我々以外にないのだ」との田谷氏の叱咤激励により、一生懸命、身振り手振りを交えての奮闘であった。

どうやら、仕事にも慣れてきたので、それまでお寺に置いてもらっていた家族を、病院の付属宿舎に引き取る準備をしていた矢先、終戦以来家族を守り、ややもすれば自暴自棄になる私を諭し、支えてくれた父が、くしくも私の誕生日である11月26日に、枯木が倒れるように他界してし

まった。もともと外地で骨を埋めるつもりでいた父なので、本望であったかもしれないが、一家の中心を失った私は茫然自失し、我に返るまで数日を要した。

しかし続発する患者の収容に追われ、悲しみを押し隠し、通訳業務に専念した。私にとって唯一の心の支えは、自分の仕事が直接同胞の命を救うのだ、という自負心だった。私をつたないロシア語が一人でも多くの同胞の命を救えるのであれば、本望だと思ふ気持ちでいっぱいであった。そしてハ爾濱学院の精神である自治三訣(要旨)人のお世話になるな、人のお世話をしよう、報いを求めるな)を実践する絶好の場であった。

昭和20年8月から21年3月までの、咸興周辺の日本人の死亡率は、全体の約36%で9000人近くに達していた。収容施設が劣悪だった富坪・五老地区の死亡率は50%近くにも及んでいた。病院の従業員にも犠牲者が続出した。ソ連軍も病院長のペトロフ少佐及びキーエフ大学の学生であったミーチン軍医中尉の2人が罹病し死亡した。

病院長で内科医のペトロフ少佐は

生粋の共産党員であったが、思想、人種を超越した人道主義者で、咸興地区における発疹チフスの撲滅のため正に命を懸けて戦ってくれた人である。病院開設当初は、やや強引な手法で、物資の調達や人集めを行つたため、ソ連軍の上級司令部から大分睨まれていたようであるが、日本人にとっては、正に神か仏のような人で、部下に対しても一兵士に至るまで、それまで見てきたソ連兵と違い規律厳正で、病院長を中心に一丸となつて使命達成のため、死力を尽くした人たちであった。田谷氏も私もほとんど同じ時期に罹病し、発疹チフスと再起熱を併発し、約1週間、40度以上の高熱に見舞われ、危うく命を落とすところであった。発疹チフスに一度かかると、免疫ができるが、最初の罹病時には、カンフル、リンゲル、ブドウ糖、ビタミン剤などにより体力の温存をはかり、高熱の期間が過ぎるまで、じつと我慢して待つしか手段の無い病氣である。それと感染媒体である虱を熱消毒により、徹底的に撲滅することが肝要である。ペトロフ少佐の迅速で、勇猛果敢で、適切な処置により、あれほど猛威を振るっていた発疹チフス

#### (6) 集団脱出計画の展開

2冬目を迎えると、ほとんど全滅するのではないかとの危機感を抱いた日本人世話会では、昭和21年の春以来、執拗な嘆願と長老たちの必死の工作により、ソ連軍司令部及び北鮮当局の説得と籠絡に努め、1冬目は、生き残った日本人避難民を陸路又は海路で、日本に向かつて送り出す計画を展開していたのである。

北鮮当局との折衝には、労働運動のため長い間日本統治下の刑務所に、拘留されていた磯谷氏や松村氏の労働運動中の人脈を利用した工作が功を奏し、ソ連軍司令部との折衝には田谷氏の語学力及び折衝能力により着々と進展しつつあった。そのような緊要な時にもかかわらず、昭和21年夏のある日、突然、その肝心の田谷氏が、徴用されていた日本人技術者の早期帰国について、交渉中の通訳の最中に逮捕され、咸興刑務所に拘留されてしまった。

通訳を失った世話会では、早速私をピンチヒッターとして起用し、それからの毎日は、世話会の役員とソ連軍司令部への日参が始まった。

又は黙認するように強く訴えたのである。春以来の世話会の努力が実を結び、ついに当局は黙認すること、貨車の使用を許可することを言い渡してきた。

や、米軍の飛行機で世話会の会長、幹事と私の3人を龍山にあった米軍の第8軍団司令部の情報部(G2)に連行していった。そこで約1週間にわたり尋問を受けたが、実際は北鮮のソ連軍に関する情報が狙いであったようである。挙句の果てに、今度は米軍の情報部員として残るよう要請されたが、断固としてお断りした。もし残っていたならば、朝鮮戦争に巻き込まれ、二度と日本へは帰れなかつたかもしれない。

が、数奇な自分の青春時代の1ページを思い起こさせてくれた。そして今でも、田谷氏を中心に、前述の磯谷氏をはじめ、ボランティアで活躍していた医師や医専の学生、看護師見習の女学生や、入院していた人たち並びに、戦後の北鮮で苦勞して引き揚げて来られたその他の人たちも含めて、「済恵会」と称する仲間の会を、年に一度開催し、当時を偲び亡くなった人たちのご冥福を祈っている。

軍司令官のスクーバ大佐に通訳している横で、ソファーに座っていた白髪のソ連軍の大佐が、会長の話をスクーバ大佐に、逐次、同時通訳しているのに気づき、不審に思ったが、後で同行者の1人が、あの男は終戦前、道立病院で守衛をしていた男に似ていると聞き、初めて納得した。

早速、あらかじめ設定し、ひそかに既に使用していた次の①咸興→元山→鉄原→京城ルート(内陸ルート)、②咸興→元山→襄陽→注文津ルート(日本海沿岸ルート)、③咸興→興南→海路→注文津ルート(海上ルート)の3つのルートを使用したの、数百人単位の集団脱出計画が、直ちに、半ば公然と展開され、残留希望の数百人を除き、その年の秋までに計画を終了することができた。

日本政府が、初めて引揚船を北鮮に派遣したのは、更に翌年の昭和22年のことで、釈放された田谷氏も、この便で帰国された。

3 その後の生きざま  
昭和25年6月、海の彼方に再び火の手が上がり、マッカーサーの命により警察予備隊が創設された。政府と軍の庇護を失った外地の同胞が如何に悲惨な目に遭ったかを、つぶさに体験した私は、再び同胞を戦火にさらしたくない一心で入隊した。また、旧軍に染まっていない若い我々が中心となって、新しい国防組織を作らねばならないという自負心で入隊したのが、当時の私の偽らざる心境であった。

丸裸で伝染病菌をまき散らしている日本人避難民は、ソ連軍にとつても北鮮当局にとつても、早く日本に追い返したい厄介者であったが、政府間の話し合いがつかないため、手の打ちようがない状態であった。その彼らの心情をうまく利用し、38度の線は自力で突破するので、その近くまでの貨車による集団移動を許可、

その計画の主要な人物であった田谷氏を拘留中のまま置き去りにすることは、断腸の思いであったが、世話会の閉鎖に伴い、やむを得ず、会長や役員の人たちとともに、私も最後の便で、海路日本海を百人乗りぐらの小さな帆船で南鮮へ脱出し、半島を横断の後、仁川経由で帰国したのが昭和21年11月であった。

(7) 外務大臣表彰状  
昭和47年、実に27年ぶりに、当時の避難民救済活動の功績に対する外務大臣表彰状が回り回って任地の旭川に送られてきた。たまたま、避難中の若き10代のハル濱学院生2人の北鮮における活躍ぶりを聞いた外務省が、遅まきながら、福田赳夫外務大臣名義の表彰状を発行した由であった。主役はあくまでも田谷氏で、

ソ連軍の侵攻以来、戦火からの避難、ソ連軍による逮捕、刑務所生活、義兄との生別、北鮮保安隊による抑

注文津からまっすぐ、日本へ帰国できるものと思っていたら、注文津の米軍キャンプでは、私たちの情報も既に入手していて、到着するや否

協役であまりお役に立たなかった私など、先輩の付録でもらったようなものである。一片の紙切れであった

ソ連軍の侵攻以来、戦火からの避難、ソ連軍による逮捕、刑務所生活、義兄との生別、北鮮保安隊による抑

ソ連軍の侵攻以来、戦火からの避難、ソ連軍による逮捕、刑務所生活、義兄との生別、北鮮保安隊による抑

留・拷問・南方への脱出、38度線突破への挑戦・失敗、乞食のような流浪の旅、父の死、避難民の救済活動、ソ連軍との折衝、集団脱出、南鮮經由の帰国等々、それまで考えてもみなかった過酷な数々の経験をし、わずか1年半有余の間に、しかも16、17歳という最も多感な時期に経験した私は、誰よりも戦争を嫌い、平和を愛する人間になっていた。しかし同時に、他国の侵害により自由を失うことの方がもっとも嫌いな人間になっていったわけである。地球上に戦火の火種が尽きない限り、嫌でも自分の国は自分で守らなければならぬことを痛感していた。警察予備隊に入隊してきた、かつての職業軍人の人たちは、優秀で民主的な人たちから、選抜されて入隊してきたので、警察予備隊から保安隊へ、更に自衛隊へと健全に発展し、私の入隊時の心配は杞憂に終わった。もちろん、この間における国民の厳しい批判や監視の目が、また良い意味でのシビリアン・コントロールが有効に機能していたことは事実である。

昭和57年の定年退官までの32年間、部隊は第一線部隊から師団・方面隊まで、司令部は師団司令部から

方面總監部・陸上幕僚監部・統合幕僚会議事務局まで、全国を転々として勤務した。おまけに最後は防衛施設庁まで勤務した。災害派遣（水害、雪害、地震、火災、人命救助等々）も幾度となく経験し、昭和51年のソ連空軍ベレンコ中尉による函館のMIG-25の不法侵入にも直面した。大過なく勤め上げた、と言いたいところだが、生来、反骨精神が旺盛なため大過だらけで、懲戒処分も2回受けたが、いずれも私個人の非行ではなく、管理上の責任罰であったので勲章の一つと考えている。そして特筆すべきことは、指揮官として勤務した際、ほとんどの部隊での統率方針に、哈爾濱学院精神の自治三訣を取り入れて成功したことである。

退官後は、日本電気グループの企業で11年間、社員教育に携わり、満65歳を契機に退職し、爾来、無為徒食の生活を送っている。この間、還暦の直後に喉頭癌（声帯上の扁平表皮癌）を患ったが、幸い早期発見のため声帯を切除せずに、顕微鏡手術と放射線治療（コバルト照射）だけで克服することができた。お陰で何とか声を失くすことなく、相変わらず毒舌を吐き散らしながら生きて

いる。そして戦争と平和の時代「昭和」を精一杯生きた私は、我が人生に悔いはなく、もはやこの世に何の未練もないが、ただ一つ、もし可能であるならば、戦後の北鮮で非業の死を遂げられた方々のご供養を現地で行いたいと思っている。

二子息、高末真氏のあとがき  
父の書き残したエッセイは以上です。父は5人兄弟（4男1女）の末っ子でした。昭和20年8月、ソ連軍の北鮮侵攻時、3人の兄たちは既に兵役に服し不在でした。幸か不幸か、父一家の脱出・引揚げは、近在の叔母の家族も含めて、当時療養帰省中で、本来なら両親の愛を一身に受けるべき16歳の末っ子の父の双肩に懸かる運命となったのでした。兵役の近い昭和2、3年生まれ少年は、大人たちの都合で、大人にされたり、子ども扱いだったりの半端者で他の年代の者には分からない苦労が多かったことと思います。

しかし一先輩との奇遇で、父は豁然と悟り、未熟ながら身に着けた口シア語を駆使して、居留地域の日本人のために尽力するのでした。事後

あらゆる苦難に対し積極果敢に行動します。また、敵のソ連軍将兵にも温かい人間愛を感じ、暴力や詭計を働いた朝鮮人たちにも、過去の日本の罪業を思い耐え抜いたのでした。不条理な状況での南鮮への脱出行、米軍の尋問に際しての南北情勢判断など、父の精神的成長を見ることができました。

父は、帰国後、自衛官の道を選びます。また、私と同じ通信科隊員として32年間の自衛官生活を全うしました。息子から見た父は常に威厳のある少し怖い父でしたが、時に優しい言葉をかけてくれる慈愛に満ちた父でもありました。父は、小生が防衛駐在官としてパキスタンに赴任中の平成14年9月28日に73歳で自衛隊中央病院において亡くなります。本音としてはもう少し長生きしてもらいたい、いろいろアドバイスをもらいたかったですが、大往生であったと思います。父の書き残したエッセイを是非次の世代に残したく本稿として取りまとめることとしました。最後に、先の大戦で亡くなられた全ての人のご冥福を心から願ひ、筆を擱きたいと思ひます。

たいと思ひます。